

英語科教育における教育実習の指導について(4)

－全体指導がもたらす教育実習生の意識の向上－

柄本 正勝・大野 誠・千菊 基司・多賀 徹哉
檀上 明隆・松本 紀子・山田佳代子・幸 建志

当校英語科では、実習生を一同に集めて、多くの実習生が深い関心を持つ傾向にある6つのトピックについて講義・演習を行う「全体指導」を実施している。授業の準備・実際・評価のそれぞれの段階で授業を省みる視点を与えることで、実習中の反省会が活発になることや、実習終了後も自己成長し続けるようになることが全体指導の目標である。これは従来でも指導されてきたことでもあるが、全体指導を実施するのは、実習生が共通の体験を持つことで、より活発に意見を交換し、授業に臨む意識を更に向上させる契機となることを期待するものである。

本稿は、(1)全体指導の目標を振り返り、(2)1999年度の全体指導を概観し、(3)これまで3年間(5期)に実施した全体指導に対する実習生のアンケートを分析する。特にアンケート分析は、実習生が全体指導を通じて、授業に臨む意識がどのように向上するかを具体的に示すものである。

I はじめに － 全体指導の目指すもの －

当校の英語科では実習生5名程度を1グループとし、2名の教官が担当して、授業観察や授業実習を指導している。従来はこのグループ別・個別指導のシステムを中心に教育実習を行ってきた。1997年度後期より、附属校での実習というスケールメリットをいかすような形の指導形態を求めて、全体指導を始めた。授業者としては初心者である実習生の共通の悩みを解消するため、全体指導の目標として、①授業観察の目標を明確にする、②指導案通りに進まない理由を「発問」の分析などにより考えさせる、③実習終了後も教師として自己成長を続けられるような観点を与える、といったことをテーマに全体指導の内容が検討された。

全体指導の形態は講義と演習に大別される。特に演習形式の全体指導では、実習生同士が意見を発表・交換し、指導教官がその討議にフィードバックを加える。自分の担当教官以外の教官の意見を聞き、他の実習生と意見を交換することで、実習生それぞれが持つ様々な意見をオープンにし、そのことが授業に臨む意識を変えるきっかけになる。この演習形式の主なメリットである。

実習生が持つ悩みは、文献調査、当校で実習を経験した実習生が提出するレポート『教育実習を終えて』の質的分析、実習生の指導を通じて蓄積された経験を指導教官が共有することにより明らかにされ、全体指導の内容・指導方法の検討に活かされた。1997年度後期の教育実

習に始まった全体指導は、若干の内容変更もあったが、次に述べるような内容で1999年度は実施された。

II 全体指導の内容とスケジュール

(1) 教案作成演習

教育実習初日に全員で同じ授業を観察し、観察した授業について、授業計画時に必要な用語を正しく使用して教案を書くことができるか、ということを確認する。授業後に授業者が授業の目標及び授業を構成する諸活動の目的を実習生全体に説明する。さらに翌日、授業をした教官が教案を点検し、短時間ではあるが面接による個別指導を行う。授業を構成しているそれぞれの活動が、授業の流れの中で、どのような関係にあるのか、ということについて授業者の意図通りに見抜けているかを学ぶ場でもある。授業者のねらいがわからない場合は、そのことを全体指導や個別指導の時に質問し、確認することができる。

(2) 授業観察演習

授業観察の前に、実習生を4班程度に分け、班別に観点を指示してビデオ録画した授業を観察させる。授業の中で<1>教師の動き、<2>生徒の動き、<3>「学習者中心」という発想がどこに見られるか、<4>4技能のバランスはどのようにとられているか、<5>英語のインプットの質・量は適切か、等の観点を与えて授業を観察させ

班別で討議した後全体で発表させる。このことは、与えられた観点に観察を限定するという事ではない。

1998・1999年度は公開授業のビデオを用いた。ビデオ録画された授業では、授業者や学習者の声が聞き取りにくいといった技術的な問題も発生する。しかし、生の授業では、授業者が上述のような観点で実習生に分析されているということを知っているため、必要以上に意識をしてしまう可能性がある。そのようなデメリットを避けるため、ビデオ撮りした授業を用いた。

(3) 入門期の指導について

中学1年生の授業を実習生全員で観察し、同日放課後、授業者が入門期の指導において授業計画時や実施時に特に意識していることを講義形式で発表し、実習生の質問に答えるものである。

中学1年生の授業は、非常に少ない言語材料で構成されるため、学習者の反応は、授業者の持つ学習・指導経験や言語学習理論によって凝らされた創意工夫に、大きく影響を受けると言える。とはいえ、「自分が見たこともない授業」に圧倒される実習生も多いのがまた事実である。そこで、授業者の授業に対する意図を読みとるために必要な、理論的背景を整理するためにも、入門期の授業観察とその授業の意図についての講義を、実習期間のできるだけ早い時期に実施することは大切なことであると考えている。また、言語材料の音声面の取り扱い方、学習意欲を高める工夫等、高学年になればつい単調になりがちな部分が、入門期であれば明確に授業の活動に反映されるという特性も見逃せない。

音声面で強調すべき基本的な考え方は、よく聞き・よくまねて・よく声に出す、ということだが、これは発音できない単語や英文は使えないからである。口の形や舌の位置、息の出し方にまで注意させることが重要であることが授業観察の中で実際に見ることが出来る。中学1年生は、教師の発音を実にうまくまねる。教師の模範としての発音が重要であることがはっきりと見てとれる。文レベルでの抑揚も場面に直結して意味を左右する働きのあること等も、言語材料が限定されているとよりはっきりと理解できよう。これらの要素が、実際の言語使用を意識した活動の中でどのように指導されているかを観察していく契機となる。この時期は音声面の知識とつづり方の規則の結び付きを形成するために非常に重要な時期と言える。その目的達成のためには機械的な練習も大切であるし、既習の語の復習も重要な役割を演じる。こういった要点を授業観察に続く講義で授業者が述べる。

(4) 教材研究について

この講義では、日々の授業実習を成立させる狭義の教材研究にとどまらず、英語を教えることを通じて何を教えるか、という大局的な観点の養成を目指す。その精神は、H.R. Mooreの "Whatever educators do is education." という言葉に要約されるように、教師は生徒と関わる全ての機会と自分の仕事を結びつけることが、非常に大切であるということである。つまり、50分の授業で扱える材料は限られているが、その内容はあらゆる場面で、より大局的な観点の養成につながるように提示されなければいけない。例えば、scienceの綴りはなぜsc-なのか、それを問う生徒と、それを共に考える教師が本来の教育の姿であろう。そこで scent out や be conscious of と sc- はギリシャ語の語源に由来する「知」であることに結びつけて英語の語形成の法則の形成につながるのである。

「人間は教育の手を加えなければ『人間』になれないのだ」と既に300年前にコメニウスが「大教授学」で述べているように、“studentship”の確立を目指すからには、教師に“humanship”が確立されなければならない。今扱っていることがらを大局的な観点の養成に結びつけることのできる姿勢を身につける、あるいは身につけようとする熱意こそが教師に求められている。その熱意を持って教材研究をすすめる必要がある。

(5) 効果的な発問を目指して

この演習では、ある共通の教材を提示された実習生が、その教材の理解のために考えた発問を発表させて、意見交換することで、様々なタイプの発問が読みを深めることにつながるとう理解させることを目指す。発問のタイプは、薬袋(1993)を参考に、 $\langle 1 \rangle$ 事実を問うもの、 $\langle 2 \rangle$ 原因・理由を問うもの、 $\langle 3 \rangle$ 内容全体を問うもの、 $\langle 4 \rangle$ 生徒の意見、考えを問うもの、という分類をした。発問は、授業者が通常イメージしている(英語での)学習のあり方に影響を受ける。そのため、発問のタイプがある特定のものに偏ることが、実習生の授業ではたびたび起こる。十分に生徒に内容を読みとらせたかったり、あるいは内容に関連して生徒の考えを引き出したければ、それぞれの目的に応じた発問が必要になるが、日頃からそのような読みを英語でしていない場合もあるようだ。

実習期間の中頃、つまり授業実習を数回実際に体験した後この演習を実施すると、他の実習生の作り出した発問を手掛かりにして、それまで各実習生が思いもつかなかったタイプの発問があることに、気づくことができる。このことは、例に挙げたような発問のカテゴリーを

利用することでより理解が深まる。特に鑑賞レベルの発問の例は多様性に富むため、意見交換によって全体指導がまさにその意味を発揮する。

また、発問によっては教科書に書いてあることをそのまま答えるもの、まとめる必要のあるもの、自分の考えを述べる必要のあるもの、というレベルの違いもあり、生徒から反応が返ってこない場合の原因が、このレベルの違う発問が交互になされることにあるということも十分に予想できるので、発問のカテゴリー分析は、授業の構成を計画する時に利用できる考え方である。

(6) 授業の評価について

この演習では、実習生が授業実習をほぼ終えた後で、教師として成長し続けるため、自分の授業を評価する視点を与えることを目的とする。生徒が本当に授業の内容を理解したかどうかを判断する材料として、発問をとりあげた。実習生や指導教官の発問に対して生徒から期待通りの答えが返ってこなかったケースをいくつか提示し、その原因を考えさせたり、曖昧な発問を実習生自身に答えさせることで、発問を熟考することの必要性を理解させる。発問が授業者の意図通り機能しない理由をあらかじめ理解しておくことで、教材研究のあり方や、授業に臨む態度が変わり、定期考査の作問時にもそのことが意識されるものと考えている。

(7) 1999年度後期の全体指導スケジュール

既に述べた全体指導の内容がどのように実施されたかを、以下に述べる。

(1) 教案作成演習

実習第1日目 6時間目 授業観察
7時間目 授業について質疑応答
宿題：教案作成
(翌日教案を提出後、個別指導)

(2) 授業観察演習

実習第2日目 4時間目 授業観察(一部)及び
討論

(3) 入門期の指導について

実習第2日目 5時間目 授業観察
7時間目 講義・質疑応答

(4) 教材研究について

実習第4日目 6時間目 講義

(5) 効果的な発問を目指して

実習第7日目 4時間目 講義・演習

☆研究授業

実習第12日目 3時間目(中学)4時間目(高校)
放課後 全体反省会

(6) 授業の評価について

実習第13日目 4時間目 講義・演習

Ⅲ 全体指導で実習生が学んだと感じたこと

1997年度後期から1999年度後期までの5期に当校英語科で教育実習を経験した学生は合計64名である。そのうち54名が英語科の用意した『全体指導に関するアンケート』を提出した。その中に見られた記述を振り返ることで、実習生が教育実習中でも全体指導を経験したことでのどのようなことを意識するのかを明らかにしたい。

ただし実習終了後に自由記述・時間無制限で行ったアンケート調査であるため、その妥当性については以下の限界を意識すべきであろう。まず、実習生が、アンケートの返答に用いた言葉の選択にどのような注意を払ったか全く不明であるし、どのような理論・経験に基づいて実際のアンケートの言葉が出てきたのかわからないため、言葉の解釈に悩む場面も多々あった。実際に全体指導を担当した教官が指導内容を振り返りつつ、あるいはグループの指導教官が、アンケート記入者の授業実習はどのようなであったか、反省会でどのような意見を言っていたか等を振り返りつつ、本研究参加者の判断で慎重に言葉を補い、分析を進めて行かざるを得なかった。

また、このアンケートの回答は、仮に全体指導が無かったとしても、個別指導やグループ別指導で経験した授業実習や観察実習で理解し得たことであるかもしれない。このことを明らかにするためには、対照群を作った実験も考えられなくもないが、その目的のために対照群とされた実習生の不利益を考えると実施は適切でないという考えを選択したために、明らかにすることはできない。全体指導による純粋な効果を追求することより、実習生の意識・行動の特性を理解することを優先したのである。

そのような限界もあるが、以下に述べるような反応があったことは事実であり、その内容を意識しておくことは、実習生が授業観察や我々の指導をどのように受け止め、自己の成長にいかすのかを我々が理解することを、少しでも助けてくれるものであると信じている。

(1) [授業観・学習観の変化]

実習生は大学で学んだ理論や、個人の体験を基にこれから自分が行う「授業」のイメージを持っているが、それと自分がこれから授業を行おうとする(附属の)生徒が持っている「授業」のイメージとの差が大きくては授業が成立しないと考えているようである。全体指導の初期には授業観察とその反省会等が中心の研修内容であるが、彼らが全体指導の初日に見た授業によってそれまで

自分が持っていた授業のイメージが崩されることが多いと、実習生の反応から推察できる。

(A)自分の経験から来る「固定観念」の揺らぎ

- ・4技能が密接に関連していることに気づいた。
- ・入門期であっても、未習事項を取り混ぜたインプットを生徒がある程度理解し、授業の流れについてこれることがわかった。
- ・英語のシャワーという考え方を知った。

(B)不十分だった「授業」のイメージが明確になる

- ・中学生に具体的にどのように授業をすればよいかイメージすることができた。
- ・中学生の授業を観察する機会があまりなかったので貴重だった。
- ・高校生にどのような授業をするかということをもイメージできた。
- ・生徒中心の授業をするためにどういったことをすればよいのか、方法としてある程度わかった。

(C)中高一貫校であることで、より明らかになること

- ・中学生と高校生の授業のやり方や生徒の態度の違いを初日に観察できてよかった。
- ・入門期の授業で気をつけるべき事を授業後に解説してもらったのでわかりやすかった。
- ・中学と高校の両方の生徒の様子の違いを知り、自分が授業する際に参考にできた。

(D)授業観の育成に関わること

- ・グループ以外の教官の考え方や授業の仕方がわかった。
- ・授業を客観的に見つめる全体指導とそれをいかす授業実習の繰り返しは、教科指導力を養うには非常に効率的であると思った。
- ・生徒が答えに詰まることこそ学習だということを教わり、生徒の沈黙に以前ほど動揺しなくなった。
- ・「教育」とはなにか、ということについて改めて考えさせられた。
- ・教師の在り方を考えた。
- ・なぜ英語を教えるかについて考えた。
- ・自分自身の考えを持つことが大切だということわかった。

(2) [授業観察]

50分の授業を観察し、その観察で学んだことを自分の中に取り入れる、という作業を繰り返す。そのような経験を繰り返す中で、自分の授業観が育つ、ということになる。従って、実習にきた段階で、(1)で述べたような授業観しか持たない実習生が、ただ観察しなさい、と指示されても、その観察が自分の授業を「変える」ものに

つながるのは容易なことではない。問題意識を持って授業観察をするように導くことの必要性がアンケートから感じられる。

実習生は附属校での授業観察の経験があるものもいれば、ないものもいる。初日から反省会の中心になって建設的に議論を進められる実習生も少なからず存在する。

- ・観察すべき視点が整理されたり、新しい視点を示されたので観察に役立った。
- ・授業が何を意図してなされているかわかり、自分の授業観察の視点を確認できた。
- ・初期の段階で、英語の質と量という視点で授業観察することもできると気づくことができた。

(3) [授業計画・指導過程]

当校での授業実習が始まって教案を書き始めると、50分の授業をイメージすることが非常に難しいことが、実習生のアンケートから読みとることができる。授業実習への助走期間としての全体指導を、実習生は高く評価している。

深沢・野澤(1995)も授業批評日誌を分析した研究の中で指摘しているが、指導過程に関する具体的な記述が全体指導のアンケートの中であまり見られない。指導過程を意識して観察するというのは、Richards(1987)の指摘する、教えることの容易ではない macro-skills と考えてもよいであろう。全体指導の中の個々のプログラムが micro-skills を手がかりに展開されることが多い、ということが原因とも考えられる。macro-skills の獲得の重要性は実際に授業をしないと気づかないのであろう。我々が全体指導の指導内容を考えるときに自己点検が必要などころである。

とはいえ、授業の一つ一つの指導技術や活動の分析が、より大局的な見地に立った授業の全体像の理解につながっていくようなアンケートの記述も見られる。

- ・まず授業の観察をする事が自分の授業の組み立てを考える上で有意義だった。
- ・観察で出された課題は、自分が教案を作るときにいかせる様な視点だった。
- ・教官の授業を観察することで生徒の様子や反応が少しわかった。
- ・授業という一つの流れの中に、分けられる活動がある、という授業構成の一側面がわかった。
- ・教材研究は担当する单元だけではなく、教科書一冊を対象とする必要性が理解できた。
- ・教案にどのようなことを盛り込んでいくかを確認できた。
- ・教案の書き方がわかった。

- ・実習の最初のほうで教案指導があったのが助かった。
- ・教案作りでも冷静にバランスよく書くよう意識できた。
- ・生徒がどんな時集中を欠くのかのかわかり授業観察の参考になった。
- ・授業におけるポイントの置き方が大切なことがわかった。

1年間の英語学習の中で、実習生が授業を担当する6月や10月は学習者にとってどういう時期であるのか、あるいは、50分の中で4技能のバランスを常に追求していくことが無理なら、1週間、1ヶ月あるいは1学期や1年という期間で考えていく必要性もある。ここでは記述がないことでも分かるように、なかなか全体指導だけでは指導が難しいが、実習の中で気づかせなければならないことでもある。

(4) 〔発問に関して〕

(A)発問の分析に関して

授業はキャッチボールのように、と言われる。どのような球をどのように投げるのか、それが直接明らかになるのが発問であるから、実習生は発問について大いに悩む。学んでいるはずのことが、意外と身につけていないことがはっきりわかるのがこのテーマである。

- ・発問のレベルを考えなければならないという言葉は自分の授業の上で道標となった。
- ・発問を一人の生徒とのやり取りではなくクラス全体に返していくということが参考になった。
- ・発問の傾向や不足点を確認でき、その後の発問作りに役だった。
- ・発問には様々な種類のものがあり、授業の目標に応じて適切な種類の発問を考えなければならないことを痛感した。
- ・何回か授業をして自分の問いに生徒が思う様に反応してくれないと感じ始めた頃だったので、この時期（実習開始1週間程度経過後）に発問について指導があったことは時期が良かった。
- ・発問のカテゴライズと実際の発問の問題点を指摘するという活動が特に参考になった。

(B)自分の発問の背景に関して

「自分が体験してきた授業は訳読であった。」という実習生ほど、発問の内容には悩まされる。リスニングやスピーキングのような活動は1回2回の実習の授業であれば、どこかから借りてきたアイデアだけでも切り抜けられる。しかし、授業の大部分を占めるリーディングの授業では、目指すべき授業観とはっきり関連して発問が考えられないと、実習生は教案が書けないということになる。それを突破するきっかけと

なりうるのが、全体指導でアイデアを交換し、刺激を受けることであるようだ。

- ・自分の意見をまとめさせるような発問もあるということを知った。
- ・他の実習生の持つ異なる視点からとらえた発問を共有することができてよかった。
- ・同じ教材で様々な発問ができることを改めて感じた。
- ・同じ内容を問う発問でもその仕方や表現が全く違うことに気づいた。
- ・自分の発問の足りない部分に気づいた。
- ・（自分が発問を作る際の）無意識の逃げに気づくことができた。
- ・発問の意図を考えるきっかけとなった。
- ・発問を（簡単なレベル）→（鑑賞レベル）まで組み立てる努力をするようになった。
- ・教師の与える発問がよく検討されていなければ、誤解に基づいた様々な反応があることが分かった。それで自分の発問に生徒が答えるのを聞くときには自分の意図が伝わっているかどうか気をつける態度をこころがけた。

特に実習の最後の全体指導で、過去の実習生による、様々な解釈が可能な発問の例を出し、実習生に答えさせる体験をさせた。これらが定期テストで出されたときのことを想像させると、テストの作成において、誰か他者の視点を取り入れる必要性を感じた、というコメントが出された。

(5) 〔授業運営〕

意外に徹底していないのがこの授業運営に関する心構えである。一人で40人ほどの生徒を相手にするわけであるから、効率のよい運営方法、というのがあはずである。ただし、教室のような設定で授業を行った経験が全くないという実習生がほとんどであることを考えると、心構えがないのも当然であるかもしれない。指導教官の気配りの見せ所であろう。

- ・生徒の動きを頭に入れておく必要があるということを知った。
- ・生徒中心の授業をするためにどういったことをすればよいか、自分の授業のヒントになった。
- ・生徒の様子・先生の指導の様子がよく観察できた。
- ・学習者中心の授業になるよう心がけることすらわかっていなかったため、全体指導でそのことについて示唆を受けてよかった。
- ・（実際に授業をした教官に質問をしたことで、）生徒を指名をしたあと、どれくらい待つか、について考えるよい機会となった。

- ・教師の発する言葉に誤解を招く可能性がある意識できた。(例)「文」と「文章」

(6) まとめ

授業は人間対人間である、という姿勢を持ち続けると、動機づけを高める工夫につながるであろう。教材研究の段階で、いかに生徒の立場に立って考えるか、あるいは、教材研究した後で、授業の目標を考慮して授業の内容を精選し、効率のよい授業運営を考えていくことが授業の成立への道である。実習生のアンケートにみられる反応は、彼らの持っていた「授業観」と、我々の示した「授業観」にギャップがあったためにおこったものである。これは、見方が違う、というものから、未成熟であった、というものまで様々である。「発問」を取り上げるだけでも、授業の全体像を考えることにつながる。

「なぜ発問をするのか。(授業の目的と発問の中身)」「発問の多様性とバランスをどう考えるのか」「発問を手がかりにより深い内容理解に発展させるには」「発問に対してどのような答えが予想されるか」「生徒自身の考えや意見を問う授業をどうつくるか」「生徒の予期せぬ反応に対する対応をどうするか」「生徒の発言をどういかして次につなげるか」「英語と日本語の使い分けをどう考えていくか」

これらはすべて、常に問いかけ続けなければならない我々に対する「発問」である。

IV 実習生による全体指導の評価

(1) 全体指導が役に立った理由

グループ別・個別指導のシステムで行ってきた教育実習を、スケールメリットの大きい指導方法で補うことを目的として、全体指導が始められた。その内容や指導方法は、授業者としては初心者である実習生が理解できるよう、あるいは、多数の実習生が集う附属校ならではの環境をいかすことができるように考えて作り上げた。その利点を実習生の言葉で概観したい。

- ・実習生がお互いに、あるいは実習生と教員が(従来のようなグループ別の指導よりもより活発に)意見を交換できるため、お互いに情報を交換することが刺激になり、視野を広げるきっかけになった。
- ・担当教官だけでなく、複数の教官から話を聞くことができた。
- ・みんなの考えを共有できる。
- ・単なる講義形式でなく、実習生も考えたり意見を出したりする時間があった。
- ・全体指導は実際に教員になってから欠くことのできない要素を含んでおり参考になった。

- ・教職というキャリアを通じて長期にわたって解決すべき自分の課題がわかった。
- ・自分が授業をするときすぐに使えるものがあった。
- ・実習の時間の少なさをカバーしてくれる。
- ・教官自らが自分の授業について反省している言葉を聞き、肩の力が抜けてリラックスできた。
- ・前半にあった全体指導はウォーミングアップ的な意味でよかった。
- ・(授業実習だけだと、授業の直前まで「指導教官―実習生」という関係があるが、)全体指導に参加することで、教師の側から物事を考えることが少しでも早くできる。
- ・全体指導の中で行われたビデオによる授業観察は、より客観的で冷静に観察できる。
- ・全体指導における授業観察では、グループごとに与えられた視点に基づいて観察したので、自分では普段見えないような部分を知ることができた。

(2) 全体指導に一層期待すること

実習生が全体指導について以下のように要望している。すべてが実現可能ではないが、今後の全体指導のあり方を考えるときの参考にしていきたい。

(A)実習のスケジュールについて

- ・教材研究くらいまでは実習の授業が始まるまでには終わらせていたほうがよかったのではないか。
- ・実習開始までに、教材研究の仕方、実習までにしておくべきこと、授業範囲の指定等について附属の教官によるオリエンテーションがあればよい。

(B)全体指導のスケジュールについて

- ・発問関係はもっと早い時期にしてもよかったのでは。
- ・初日では実習生から質問や意見が出にくい。
- ・もう少し全体指導の時間がほしい。

(C)ビデオ録画した授業の是非について

- ・ビデオでは写っている範囲が狭いので実際の授業を題材にしたほうがよい。
- ・録音マイクが授業者から遠くにあるため、ビデオでは授業者の声が聞こえにくい。
- ・全体指導で見た授業は公開授業や、実習生の研究授業のビデオであったため、あまりに準備周到、という感じがした。もっと「普段の」授業のビデオを見たい。

(D)授業観察について

- ・初めはできるだけいろいろな人の授業を観察し、その授業の意図など聞きたい。
- ・たくさん先生の授業を観察したい。

(E) 全体指導の内容について

- ・ 具体的教材を使えば「発問」の話は何度やってもあきない。
- ・ もっと長い文章を材料にして発問の工夫を考えてみたい。
- ・ 発問が生徒に伝わらない時にどうするか、具体的に例をあげて、全体で考えてみたい。
- ・ 発問をどう「工夫」すればよいのか具体的にしてほしい。
- ・ 「学習者中心の授業」は別枠で扱ってほしい。
- ・ ALT (Assistant Language Teacher) の話も聞きたい。
- ・ 観察録を効率よく、機能的に取るよい方法があればよい。
- ・ 大学の授業と重ならない、教育実習の全体指導でこそというものがよい。
- ・ 授業観、教育観、学校観、人間観などに関して各教官の話をもっと聞きたい。
- ・ 教官の失敗談・経験談をもっと聞き、そのことを教育実習中にいかしたい。
- ・ 出し合った情報について自分たちが話し合ったりすることがもっとできたらよかった。また、各グループ別に異なる観察の視点が与えられたが、グループ活動のみで予定時間が経過してしまい、統合できなかったのが残念である。
- ・ 授業後の質問や、教官による説明の時間がもっと充実していればよかった。

(F) 指導方法について

- ・ ディスカッションにもっと多くの教官もメンバーとして加わってもらい、助言してもらいたい。
- ・ 指導教官の「私ならこうします」という視点をもっと提示してほしい。
- ・ (一般論ではなく) もっと具体的な指導をしてほしい。
- ・ 教官が交替で行なうので一貫性がない。

V まとめと課題

全体指導では、実習期間の前半には主に授業観察の観点を明確にし、幅広くする活動を、後半には発問を切り口に授業の中の様々な現象を理論的に考察していく活動を中心に行った。数々の事例を通じて、それぞれの授業観を育てることが目標であるが、アンケートの記述をみると、全体指導の内容や指導方法は実習生の実態に適していたと結論づけられる。授業実習に必要な macro-skills の獲得につながるような観点の養成も見られ、授業実習への助走期間としての役割も果たしている。

実習生は全体指導を高く評価している。このことは従来のグループ別指導のシステムが内包する短所を実習生が敏感に感じていることの現れであるとも言える。英語科の総力を挙げて全体指導に取り組んでいるという姿勢を、実習生に対して、より前面に出す努力が必要であると思われる。

VI 参考文献

- 深沢清治・野澤久美 (1995) 「英語科教育実習における Diary Studies の試み」『広島大学学校教育学部紀要 第 I 部第 17 巻』(pp. 47-53)
- 葉袋洋子 (1995) 『英語教師の四十八手⑤ リーディングの指導』研究社出版
- Richards, J. C. (1987). The dilemma of teacher education in TESOL. *TESOL Quarterly*, 21(2), 209-226.
- 千菊基司 (1997) 「英語科における教育実習生の指導について」『広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要第 37 巻』(pp. 143-149)
- 千菊基司・多賀徹哉・幸建志 (1998) 「英語科における教育実習生の指導について(2)－授業観察とその後の演習を通じての全体指導」『広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要第 38 巻』(pp. 137-142)
- 千菊基司・多賀徹哉・幸建志 (1999) 「英語科における教育実習生の指導について(3)－全体指導を通じて実習生が学ぶこと」『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要第 38 巻』(pp. 53-57)